

海蔵幼稚園新園舎完成

幼稚園建設委員会委員長

太田 南海雄

老朽化していたため、改築工事が進められていた海蔵幼稚園園舎もほぼ完成し、三月中旬には落成式がとり行なわれる見通しとなりました。

思えば「新しい園舎を」との声が聞かれてからこの方、随分

久しい月日が経過しましたが、

それだけに完成の感激は、ひとしおであります。この間、いろんな方々のご努力、ご尽力があったことを忘れることができません。紙面をお借りして、厚く御礼申し上げます。

落成式後は、例え一日でも、

二日でも現在の園児に新園舎で過ごしてもらえよう、関係者に準備を進めて頂いておりますが、新園舎で元気に走りまわると子供達の姿が、今から目に浮ぶ思いです。

今日、青少年の非行が大きな社会問題となっておりますが、非行に走った子ども達を分析すると、幼児期における「歪んだ子育て」「適切な教育の欠落」が指摘されるのであります。幼児期の歪みが、成長して非行に結びつくというわけです。となれば事は重大です。もちろん、その原因は各家庭にあるわけですが、幼児教育にかかわる者が一体となって取り組む必要があるでしょう。

設備が整い、かつ四月からは二年保育になることは、大変時を得ていると言えます。最後に園へのお願いになります。最後は、当地区の幼児教育の機関として、保育園と連携を保ちつつ、一層のご努力を期待するものです。私共も陰ながら、地域の皆さんと共に協力を惜しまぬ覚悟でございます。

厳冬も、二月半ばを過ぎると暖かい日には何処となく春の気ざしが感じられます。でも本当の春はまだまだ先……、皆様ご自愛の程を。今回は都合により紙面を縮少しました。ご意見、ご批判を賜りたく存じます。

地区広報編集委員会



地名には、その土地の歴史があり、人々の生きてきた足跡があります。それ故、地名を知ることには大変興味深いことです。今回、この地方の地名を調査・研究していらつしやる市教育委員会文化財担当主幹、森逸郎先生に、海蔵地区の地名について執筆していただきました。

一、はじめに

土地には、それぞれに古くから由来のある名前がつけられております。それを地名といえます。地名には、長い時間を経てその土地に住む人々の生活にじませた歴史の所産ともいえるべき顔をもっております。

二、地名は改変される

日本の地名は、大化改新により国郡里の制度が整備されました。たとえば、野田なら「伊勢国三重郡野田里」と呼称したものです。平安時代になると、郡名の下に郷名(前記野田なら柴田郷野田里)がつけられたりします。

小字名には、この名残りが多くあります。羽津地区に「八ノ坪」「六ノ坪」とあるのもその例です。

海蔵地区の地名を調べて

市教育委員会社会教育課

森 逸 郎

昭和三十七年施行の住居表示は、従来親しまれてきた地名を

三、地名の研究

ここ数年来、歴史学、地理学、民族学など各分野諸学間において地名研究がすすめられ、その成果には目を見張るものがあります。今、三重県においても出版二社による地名辞典執筆の競り合いもその一例であります。

四、海蔵「かいぞう」

阿倉川は、あくらがわと読めばいいのですが、果してどんな意味があるのでしょうか。いろいろと考えてみますと、海蔵地区の中央部を流れる海蔵川と深く関係がありそうです。

海をどう読むか。海部(あま)郡が愛知県にあります。地域によつては、「海」を「あま」と読ませております。志摩半島の「海女」は特に有名であります。そこで「海蔵川」を「かいぞうがわ」と読まずに「あくらがわ」と読んだらどうでしょうか。「海」がいつの時代かに「阿」に変わってしまったのでしょうか。地名に東・西阿倉川として残る川の名前に「海蔵(かいぞう)

さらに「末長(永)の地名は、河口の長大な砂浜を由来としております。江戸時代初期には、末永村から浜一色村が分村しております。浜一色は字の示す通りであります。阿倉川の台地から南方を見渡したかつての海蔵地区は、雄大な海蔵川と伊勢湾の姿を浮び上らせたものでしょう。

明治二十二年、東阿倉川、西阿倉川、野田、末永の四ヶ村が合併して海蔵村と名付けたことは、まことにすばらしい先人の智慧であったといえましょう。昭和五年、四日市へ併合して村名が消滅したことはさびしい限りであります。(次号へ続く)